

小僧の神様・城の崎にて

志賀直哉



新潮文庫

さま 様
かみ 神
の 崎
ぞう 僧
の 崎
こ 小
城

定 価 240 円

新潮文庫 草 30 E

昭和四十三年七月三十日 発 行
昭和五十四年二月二十日 二十一刷

著 者 志賀直哉

発 行 者 佐藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六)(五一一)
編集部(〇三)(二六)(五四二)
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

小僧の神様・城の崎にて

志 賀 直 哉 著

新 潮 社 版

1802

目次

佐々木の場合.....	七
城の崎にて.....	二三
好人物の夫婦.....	三三
赤西蠣太.....	五一
十一月三日午後の事.....	七三
流行感冒.....	八三
小僧の神様.....	一〇九
雪の日.....	一二三
焚火.....	一三二
真鶴.....	一四七

雨	蛙	一五五
転	生	一七一
濠端の住まい		一七九
冬の往来		一八九
瑣事		二〇五
山科の記憶		二二五
痴情		二三五
晩秋		二三七
解説	高田瑞穂	

小僧の神様・城の崎にて

佐々木の場合

亡き夏目先生に捧ぐ

君は覚えているかしら、僕が山田の家に書生をしていた事は。君が国の中学にいる頃だ。まあそれはどうでもいい。僕が山田の玄関番をしながら士官学校の入学準備をしている時だ。……僕はお嬢さんの守っ児と関係したんだ。僕より三つ位下だった。多分十六だったと思う。その時は余り大きな方ではなかったが、それでも身体がいい、顔は普通だったが何処か男を惹きつける所のある娘だった。僕も初めての経験だし、割に上ほせていたが、何しろ相手が気の小さい奴で他人に対し余りびくびくするので僕はよく腹を立てた。夜僕はよく漬物臭い物置で待ちぼうけを食ったものだ。薄ぎたない逢引だが、守っ児と玄関番の恋だから仕方がない。これと云う長所もない奴だが、無闇と従順なんだ。これが長所と云えば長所だが、同時に如何にも勇氣のないという欠点になって、それでは随分がみがみ怒ってやった。

二ヶ月位無事に経った。女中で少し位感づいた奴があつたかも知れないが、まあ何事もなく経った。歳暮近かった。その頃屋敷では主人のお母さんの隠居所を建てるので毎日大工や何か七八人入っていた。そして仕事が終わると、鉋屑や木端でたき火をして、いっぶくやるのが毎夕の例になっていた。左官の泥練りをやっている滑稽な爺がいて、これがよく話の中心になって、若い時分の吉原とか根津の話をして皆を喜ばしていた。そんな話に興味を持つ事は如何にも気がとがめだが、未だ知らないそういう世界の事は中々僕の好奇心を惹く。時々何気なく僕もその仲間に入って火にあたっていた。そして皆が帰る時水を掛けて行くのを時には僕が引きうけて後まであ

つてから消す事もあつた。

或夕方だった。僕も一緒にあたっている時、富が僕を呼びに来た。主人の使いで直ぐ築地まで行ってくれというのだ。しゃがんでいた僕は直ぐ起つて来た。富もついて来た。「そう直ぐ逃げて行くもんじゃないよ」と泥練の爺が呼びかけた。「お前に惚れてるのが泣くよ」皆がどツと笑った。富は僕を追い抜いて耳まで赤くして先へ馳けて行つた。僕は自分も一緒に侮辱された様な気がした。そして何だか富に腹が立った。僕はその晩富に怒つたが、自分でも何を怒っているのかよく解らない位だから、富は何で怒られるのか解らず、妙な顔をしていた。それでも怒られたので弱っていた。

守りの名は富と云うのだ。こんな事があつてからは決して皆のいる間は来なくなつたが、帰つて了うと時々お嬢さんを連れてあたりに来た。お嬢さんは五つ位だったかしら、ひどいすが眼で顔だちも痩せて妙に鋭く、性質もいやにひねくれていた。かなり感じの悪い児だった。僕は一体子供好きでない方でもあつたが殊にこのお嬢さんは大嫌いだった。お嬢さんも僕を嫌っていた。嫌い以上妙に恐れていた。僕は全く御愛想らしい事も云わなかったし、どうかして、本でも見ている時部屋へ来ると可恐い顔をして脱む事も実はあつた。ところで妙な事はこのお嬢さんがこんな子供の癖に僕と富との関係を知っているような気がしてならなかった事だ。此方の気のせいかと思う事もあつたがそうでない場合がよくあつた。とにかく僕と富とが会う事は非常に厭がつていた。富は又こんな厭な児だったが、他からは考えられない程に愛しているのだ。お嬢さんも随分駄々をこねていじめましたが又心から富になついてもいたのだ。この関係は全く不思議に見え

た。お嬢さんが余り云う事を諾かないと云つて富が泣いて云う愚痴を僕はよく聴いた。逆も自分には勤まらないからお暇を貰う、こんな相談も二三度受けた。そんな場合大概賛成してやるのだが、少したつと富は全く忘れたような顔をしているのが常だった。僕にとって富とお嬢さんとを一緒に眺める事は気分の上で如何にも不調和でかなわなかった。又お嬢さんは何の事かよく解らないまでも僕と富との関係に或嫉妬を抱いていたし、僕にも同じ物が働いて、見た感じ以上にお嬢さんを厭に思っていたのが本統だ。僕は僕達の関係にお嬢さんと云うものが呪のようにつきまといて来そうな気がした事がよくあった。お嬢さんは子供ながら意識してよく邪魔をした。然しそれはともかくとして、お嬢さんに全く意志がなく偶然邪魔する事になる場合が實際度々あったのだ。これが何だか氣味の悪い氣持をさした。

僕達が逢引に一番いい時は主人の家族が入った後、風呂の湯が少くなるので又火をたくその時だ。その掛りは大概富が引き受けていた。その頃になれば大概はお嬢さんは眠つて了うからでもあった。僕達はよくその時を利用した。ところが妙にそう云う時眠つた筈のお嬢さんが眼を覺して泣き出すのだ。「富、富」奥さんの呼ぶ声がする。「お富さん」こう他の女中と一緒に呼ぶ。僕はこれを聴くといつも厭な氣持になった。富はそれ程に思わないようだったが、僕には何かが故意にそれをすると思われなかった。富は毎時おどおどしながら未練氣もなく僕を残して行つて了う。僕は富にも腹が立った。

實際富の弱虫には弱つた。その上二人のしている事を全然罪惡と思ひ込んでゐるには閉口した。僕は二人の關係が只の所謂いたずらな關係ではないのだ、僕が少尉か中尉になれば必ず正式

に結婚するのだからと何遍いつて聴かしたか知れない。富もそれは非常に喜んでいたが、やはり悪い事をしていという気はどうしても抜けなかった。とにかく古臭い型にはまった女なのだ。只の下らない女なのだ。然しそれで、僕には少しも悪くはなかったのだ。何かしらん愛さずにはいられないものがあつた。僕は殆ど、のべつ、怒つてはいたが憎んだ事は只の一度もなかった。富も怒られながら少しも不平を持つとうとはしなかった。只お嬢さんに対し、僕がいい感じを持つていない事だけは、云いはしなかったが、苦の種にしていたようだ。それにしろ富は一体に暢気な気分でした。それに較べると僕の心は絶えず騒いでいた。それは主に嫉妬だが、今思えばどれも下らない嫉妬だったようだ。主人に対してもそんな気を持ったし、もう五十位になる抱車夫がいて、それにもそういう不快を感じた事があつた。一々数え立てるのは下らないからよすが、何もない関係ならば総て見逃している事がらが一々感じられるからなのだ。實際淡いながら、それは在る事なのだから仕方がないには仕方がないのだ。それから主人方の富に対する使い方に僕はかなり神経質になった。そんな事は他の奴にさせればいいのにと思つて不愉快を感じる事がよくあつた。僕は自分に対する使い方には割に寛大でいられたが富の事はそうは行かなかつた。然し他の女中の事だと平気でいられる点でその気持も身勝手なものとは自分でも認めていた。

歳暮も押しつまつた或夕方の方の事だった。大工共の例の焚火の集會が済んで、僕一人受験問答の本を見ながら其処に残っている時だった。富がお嬢さんを連れてやって来た。僕は何か少し癢に触っている事があつて、いきなり、

「弱虫」と一寸からかうとも怒るともつかぬ調子で云つた。富は又怒られるのかと思つたらしく

少し不安な顔をしかけたが、なるべく笑談じょうだんにして了解とするように、

「強虫さん」と媚こびるような眼付をして云い返した。

「馬鹿」

「お利口」

富の身体に倚よりかかって、黙って上眼使いをして二人の顔を見較べていたお嬢さんが不意に、
「佐々木馬鹿。佐々木馬鹿」と腹からの悪意を示して罵ののしるように云い出した。

「お嬢様。そんな事おっしゃってはいけません」富がお嬢さんをたしなめた。僕は只苦い顔をしていた。

お客で閉め残して置いた座敷の雨戸を閉めに行かなければならないと思つたがその前に富に強い接吻せつぶんをしてやりたいという慾望が僕には強く起つていた。二人の関係では主おもなもの接吻だと云えた。二人にはそうゆっくり話している時間はなかつた。僅な時間に現す愛情は實際接吻よりなかつた。しかし僕の接吻は甚はなはだ乱暴だつた。立つていて、被いかぶさるやうにしてぐいと抱き締めてやる。小さい富はよく、うツと唸うなつた。

「一寸ちよとこれを読んで見ないか」こう云つて僕は落ちていた釘くぎを拾つた。

「何? ……お嬢様一寸」富は倚り掛つていたお嬢さんをちゃんと立たして寄つて来た。

「いいかい」僕は地面に「ヨオアル」と書いた。

富はそれを見たまま首肯うなづいた。少し笑つていた。

「それから」と僕は又「スグコイ」と書いた。ところが富は笑つてだけいて首肯うなづかなかつた。

は「バカ」と書いた。そしてにらんでやった。富は当惑したような顔をして眼でお嬢さんが居るから駄目だと云う。僕はこういう時、中々思い返せない悪い癖がある。僕は怒った顔をして今書いた文句を消すと黙って其処（そこ）を起って行つた。實際怒つてもいたが、そうすれば気の弱い富は来ずにいられない事を知っているのだ。

例の黴臭（かびくさ）い物置へ行つて待つていた。すると案の定、直ぐ富は心配顔をしてやって来た。そして歎願するように小声で、

「キッスだけよ」と云つた。

「当り前だ」

義務的なのが癪（さ）に触つたから、富が脊延（せのび）びをし、あごを突き出し接吻しようとするのを故意（わざ）と届かないように此方（こなた）も上を向いて置いて力を入れてぐいと抱き締めてやった。富は苦しがつた。

女中の悲鳴が聴えた。二人は驚いて物置を飛び出した。お嬢さんがたき火——既（い）におきにはなつていたが其処に仰向様に倒れている。直ぐ抱き起したが、もう氣を失っている。毛がこげるのか肉が焼けるのか変な臭（にお）いがした。傍（そば）に大工が仮りに作つた坐りの悪い椅子が倒れていた。それに乗って仰向けに倒れたらしい。そしてその時後頭を打つて脳震盪（のうしんどう）を起したに違いない。そうでなければいくら子供でもそれ程にならない中に火から這（は）い出す位はしなければならぬ。何しろちゃんちゃん児の肩が燃え抜けていた。綿のプスプス燃えるのは中々消えない。もみ消そうとしたがいけないので直ぐ脱（だ）がしたがその時はもう肩の後をかなり甚く焼かれていた。頭だけは幸に火の端へ行つていたからそれ程ではなかったが、それでも襟首（えりくび）の上が焼け爛（ただ）れて、其処は後（ご）も毛

が生えなかったそうだと。暫く人事不省だったが気がついてからも、二三日はわからなかった。実際よく死ななかつた。一家の騒ぎは想像して貰いたい。

何しろ弱つた。僕の心は甚いぐらつき方をした。普段からお嬢さんを嫌いだっただけ一層妙な苦しみ方をした。僕はお嬢さんに対し非常に気の毒な事をしたと思った。然しそう思う事によつても僕の心に愛情は湧き上つて来なかつた。この意識は非常に気持が悪かつた。僕はこうしてはいられない気がした。第一総ては富の落度になつた。富の弱り方と来てはそれは又甚かつた。半氣違ひのようになつて了つた。飯も殆ど食わなくなつた。気の小さい奴の事で自殺でもしはしまいかという不安に僕は襲われた。然し話をする機会がなくなつた。それが有つたにしろ眼中にないように富はもう僕によそよそしくなつて了つていた。幸に自殺はしなくても氣違ひになりはしまいかと心配した。僕は何も彼も主人の前に懺悔したかつた。然し二重に富を苦しめる事を思うと、それも出来なかつた。

医者は肩の火傷はともこのままでは肉の上の見込はないと云つたそうだと。唯一の療法は他人の肉を切り取つて来てそれで其処をおぎなうのだと云つたそうだと。聴いた時僕はそれを僕の身体から取つてくれと申し出ようと思つた。そうせねばならぬと思つた。然し正直にはそれは強迫されて思ふので進んで出たい氣を起しているのではなかつた。話によると尻べたの肉を取るのださうだ。そしてそれを取られた跡は多分窪みになつて残るだろうと云う事だつた。こうなると恥かしいが僕の心では急にイゴイスティックな方面が眼を覺した。それが事件の中に没頭していた自分を広い野原に連れ出すような事をした。僕はこの事件を大きいものの一部分として見るような